

Title	対人コミュニケーションにおける感情の影響過程に関する研究
Author(s)	藤原, 健
Citation	大阪大学, 2013, 博士論文
Version Type	
URL	https://hdl.handle.net/11094/60011
rights	
Note	著者からインターネット公開の許諾が得られていないため、論文の要旨のみを公開しています。全文のご利用をご希望の場合は、 〈a href="https://www.library.osaka-u.ac.jp/thesis/#closed"〉 大阪大学の博士論文について 〈/a〉 をご参照ください。

Osaka University Knowledge Archive : OUKA

<https://ir.library.osaka-u.ac.jp/>

Osaka University

氏名	藤原健
博士の専攻分野の名称	博士(人間科学)
学位記番号	第26068号
学位授与年月日	平成25年3月25日
学位授与の要件	学位規則第4条第1項該当 人間科学研究科人間科学専攻
学位論文名	対人コミュニケーションにおける感情の影響過程に関する研究
論文審査委員	(主査) 教授 釘原 直樹 (副査) 東京未来大学教授 大坊 郁夫 教授 佐藤 眞一

論文内容の要旨

本論文の目的は、対人関係の展開を支える心的メカニズムを解明することである。そのために対人関係の形成基盤である対人コミュニケーションに着目し、人と人がどのように関わり合うのかについて実証的に検討することで、感情がいかに対人関係の展開を彩るのかを明らかにする。

本研究では、対人コミュニケーションにおける感情の影響を検討するために、対人関係の認知次元の中で第一次元とされる「競争－協調」を文脈として導入することとした(第4章)。また、感情に影響されるのは話者だけではなく相手も同様であるという考えに基づき、話者間の感情状態について「類似－非類似」という対人関係の枠組みを導入することとした(第3章)。これらを踏まえて、対人コミュニケーションにおける感情の影響過程を検討するために、話題や話者間のターン・テイキングを統制しない自然会話状況を対象として検討を行うこととした(第2章および第3章)。

第2章では、感情が「表出される情報」となることを検討するために、感情がコミュニケーション行動に与える影響について検討した。場面想定法を用いた調査(第2節)と自然会話状況における実験的検討(第3節および第4節)の結果、ポジティブ感情は概してコミュニケーション行動を活発にすることが示された。第4節で行った言語行動の分析からは、ポジティブ感情は相手のことをよく知るために会話に動機づけられることも示唆された。これに対してネガティブ感情もコミュニケーション行動を活発にすることが明らかになった。ただし、その背景には、自身のネガティブな感情状態を改善するために会話に動機づけられることが示唆された。

第3章では、話者間の感情構成(i.e., 話者間の感情状態が類似しているかどうか)という視点を導入し、感情が会話満足度や対人印象に与える影響について検討した。場面想定法を用いた調査(第2節)と自然会話状況における実験的検討(第3節および第4節)の結果、話者間の感情構成が非類似(i.e., ポジティブ感情群 vs. ネガティブ感情群)の場合には、ネガティブ感情群の話者がコミュニケーションの結果を否定的に捉える場合(第3節)と、肯定的に捉える場合(第4節)があることが明らかになった。これらは、お互いが良く知り合えるようにと設定した協調的なコミュニケーション場面において、感情誘導操作に付随した競争性の有無が新たな文脈を形成した結果であると考えられた。

第4章では、文脈としての競争－協調という視点に基づき、話者の中で「処理される情報」としての感情に着目して検討を行った。表情刺激の提示実験(第2節)と場面想定調査(第3節)による検討の結果、競争が焦点化されている場合には「良さ」を表出している笑顔の人物に対する会話動機を低く判断し、一方で協調が焦点化されている場合には会話動機を高く判断することが明らかになった。ただし、ネガティブな感情状態にあるときには焦点の切り替えが生じることが示され、競争が焦点化されている状態でネガティブな感情状態になると、協調

の焦点に基づいて笑顔の人物を判断するために、むしろ会話動機を高く判断することが示された。しかし、切り替えが生じるのは競争焦点からのみであり、協調が焦点化している場合にはたとえネガティブな感情状態になったとしても競争焦点には切り替えが生じていなかった(第2節)。これらの知見は焦点の切り替えが容易かどうか、つまり文脈の共有性の程度によって調整されることも示された(第3節)。それぞれの文脈に基づいて競争-協調が焦点化されることで「処理される情報」としての感情が異なる様相を呈することが明らかになった。

これらの知見を統合し、対人コミュニケーションにおける感情の影響過程をモデル化した(第5章)。対人コミュニケーションにおける感情の影響過程とは、「表出される情報」としての感情が基盤となって、「処理される情報」としてコミュニケーションの結果に影響する過程であるといえる。本論文で提案した影響過程モデルは、個人レベル(コミュニケーション行動や文脈の認知)と対人レベル(話者間の感情構成)を跨ぐ越階層的な視点に基づいた、統合的な影響過程モデルといえる。

論文審査の結果の要旨

本論文は、対人関係の形成基盤となる対人コミュニケーションにおいて、感情がどのような影響を与えるのかについて実験的に検討したものである。

まず、感情の社会的機能に関する先行研究を概観することで、対人コミュニケーションにおいて感情が「表出される情報」と「処理される情報」として捉えられることを指摘した。そして「表出される情報」としての感情に着目し、感情がコミュニケーション行動に与える影響について検討した。次に「処理される情報」としての感情に焦点を移し、話者間の感情状態の「類似-非類似」に着目したうえで、感情が会話満足度や対人印象に与える影響について検討した。加えて、会話に至る文脈として競争-協調という視点を導入することで、笑顔の人物に対する会話動機を検討した。

これらを踏まえて、対人コミュニケーションにおける感情の影響過程モデルを提案した。モデル内では、感情に影響された各話者のコミュニケーション行動が、話者間の感情状態の類似性や会話に至る文脈によって異なる解釈が行われていく過程が示された。まず、ポジティブ感情もネガティブ感情も各話者のコミュニケーション行動を活発にする。しかしその背後には、ポジティブ感情では関係の親密さを高めようとする動機が、ネガティブ感情では自身の感情状態を改善したいという動機が仮定された。そして、活発なコミュニケーション行動は、競争的な文脈にある場合、特にネガティブ感情を抱く話者には否定的に捉えられる。一方で、協調的な文脈にある場合には、ネガティブ感情を抱いた話者にとって活発なコミュニケーション行動は肯定的に捉えられる。このとき、競争-協調のいずれの文脈にあると判断されるのかについては話者の感情状態と動的に関連する。対人コミュニケーションにおける感情の影響過程は、個人、二者、それらを含む文脈、という異なるレベルの視点を導入することで説明される影響過程であることを明らかにした。以上より、本論文は博士(人間科学)の学位に値するものと判定された。